

蘇峰が読んだトクヴィル

— 手沢本の解説と翻刻 — (1)

福井純子

はじめに

本稿で取り上げる徳富蘇峰手沢本 Democracy in America は、Henry Reeve の英訳による 2 冊本で、版元はロンドンの Green, 1875 年に出版されたものである。この手沢本は現在、熊本県の水俣市立蘇峰記念館（旧洪水文庫）に所蔵されている。蘇峰手沢本 Democracy in America についてはすでに山下重一、杉井六郎、花立三郎諸氏によってその存在が指摘され、蘇峰の手による書き込みもその一部が紹介された¹⁾。蘇峰が本書を読んだのは、後述のように熊本の大江義塾（1882 年 3 月開校）で青年達を教育し、中央のジャーナリズムに登場しようとする準備の時期であった。彼は後年の回想のなかで、大江義塾時代に最も影響を受けた本として、マコーレーの『英国史』、プルタークの『英雄伝』、趙翼の『二十二史劄記』とともにトクヴィルの本書をあげている²⁾。花立三郎によると、大江義塾での講義「政治初歩」「政学講義」は本書に依拠したものであるという³⁾。それだけでなく本書読後に執筆された『明治廿三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ス』（1884 年 1 月刊）、『自由、道德及儒教主義』（1884 年 2 月刊）、『新日本之青年』（1885 年 6 月刊）、『将来之日本』（1886 年 10 月刊）などにトクヴィルの本書からの引用が散見されるのである。また山下重一は、蘇峰がスペンサーの『社会学原理』を読む以前に本書に接したことによって、生産主義、平民主義のモデルとしてのアメリカのイメージを形成したと指摘している⁴⁾。しかも蘇峰はこの手沢本のほとんどすべてのページに鉛筆で日本語、英語、記号、アンダーライン、サイドラインをほどこしており、書き込みは翻刻に示す通り日本語だけで 249 カ所にのぼるのである。本書の書き込みは青年期の蘇峰の思想形成を知るうえで見逃すことのできない資料である。そこで

本稿では蘇峰の日本語の書き込みを中心に、でき得る限り原資料に忠実に、書き込みの箇所と文字を復元することとしたい。翻刻を始める前に、本書の来歴とともに、明治期の日本社会における Democracy in America という書物の位置を明かにしておくことにしよう。

1. 蘇峰手沢本の来歴

まずはじめに蘇峰が本書を入手した経緯から見てみることにしよう。1925 年出版の『蘇峰隨筆』⁵⁾のなかで、彼は銀座の岸田楽善堂で『元遺山詩箋註』を 4 円で購入した話に続いて、つぎのように述べている。

予は同時に丸善よりド・トクヴィルの『米国民政』二冊を購へり。此れは有用の書なれば、如何なる高価を投ずるも、書生の胸中、何等疾しき所なかりしも、其の八円たりしことは、少からざる影響を、我が旅囊に与へたり。予は曾て一回神田の東洋館—今の富山房の前身—に於て、該書を購入はんとしたるも、囊中の都合にて果さ、りし也。而して今尚ほ此書を購入得たる当時の快心、快情を、追憶して、今昔の感に勝へざる也。

この回想によると、蘇峰は丸善において 4 円で購入したものらしい。2 冊の『米国民政』は、書生の懐には分不相応な買い物であったが、一度はあきらめた書物であったものを、ようやく手に入れた喜びが伝わってくる。これに続けてつぎのような記述がある。

今ま其の第一冊を披けば、『一八八二年九月日本東京に於て』とあり。巻末に『一八八二年十二月読み始め、一八八三年五月十八日終る』とあり。(中略)而して第二冊には、『勉めて倦まざる人は進んで止まざる人也』と記し、『一八八三年五月二十一日に始む』とあり。巻末には『精勵と熱心とを以て読了す、』

「一八八二年六月二十九日」と記し……

このうち『』の部分は、『勉めて倦まざる人は進んで止まざる人也』以外は、翻刻の箇所では明らかなように蘇峰の書き込みを日本語に直したものである。しかし『一八八二年九月日本東京に於て』を、1882年9月に東京で購入したと読むのは早計に過ぎる。花立三郎作成の「大江義塾関係年譜」⁹¹によって、この時期の蘇峰の行動を追いかけてみるならば、1882年9月には東京には滞在していないのである。以下、「大江義塾関係年譜」によって蘇峰の82年の行動を整理してみるとつぎの通りである。

82年3月19日 大江義塾開校 / 6月20日 大江義塾に熊本県の正式な許可がおりる / 6月21日 東上のため熊本を出立 / 6月26日 神戸上陸 / 7月13日 京都、大阪から中山道を経て東京に到着 東京では九州親睦会や東京政談演説会に出席 / 8月2日～4日 箱根に板垣退助を訪ねる / 8月27日 神戸で原田助に面会 / 9月3日 熊本帰着

『一八八二年九月日本東京に於て』という回想、原文では「I.Tokudomi / 1882 Sept. / Tokio Japan」と記されている⁹²。この部分は購入時の書き込みではなく、熊本に帰り着いて記されたものと考えるのが妥当であろう。

なおひとこと申し添えておくと、最初に購入をためらったのが富山房の前身である東洋館というのは、蘇峰の記憶違いであろう。小野梓が東洋館を開店したのは83年8月なのである⁹³。蘇峰が本書を手にしたのは、小野の勧めによるものという指摘があるが⁹⁴、管見の限りでは確認できなかった。しかし回想のなかに東洋館の名前を書き残していることを考えると、購入後40年以上を経てなお、蘇峰の記憶の中では本書と小野梓とが分かち難く結び付いていたといえるだろう。

2. 明治期における H.Reeve 訳の流布

蘇峰手沢本がフランス語版ではなく、H.Reeveの英訳本であることは初めに述べたとおりである。トクヴィルは、明治期の日本ではReeveの英訳本によって読まれたし、後述のように肥塚龍の日本語訳も

Reeveからの重訳であった。管見の限りでは、19世紀の日本に流布したReeve訳にも、蘇峰手沢本の1875年Green版を含めて7種類の異版がある。そこでつぎに発行年の順に、その簡単な書誌と所在、所在先の整理番号を記しておこう。

1. 1856年発行 A.S.Barnes ニューヨーク
東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵
新渡戸稲造旧蔵書 A311 / T
2. 1864年発行 ケンブリッジ
国立国会図書館所蔵 H / 100
国立国会図書館所蔵 48 / 26
3. 1873年発行 A.S.Barnes ニューヨーク
慶應義塾大学塾史資料室所蔵 福沢諭吉手沢本
4. 1875年発行 Green ロンドン
徳富蘇峰記念館所蔵 徳富蘇峰手沢本
国立国会図書館所蔵 旧貴族院本 321.8 / T632d
5. 1876年発行 ポストン
国立国会図書館所蔵 2188 / 010
6. 1877年発行 A.S.Barnes ニューヨーク
中津市立小幡記念図書館所蔵 中津市校旧蔵
洋書 311.7テ
7. 1900年発行 Colonial Press ニューヨーク
国立国会図書館所蔵 L / T632 / d

このうち3.の福沢諭吉手沢本については山下重一、松沢弘陽がとりあげており、また安西敏三の詳細な研究がある⁹⁵。安西の調査によると福沢も蘇峰ほどではないが書き込みを残している。福沢がトクヴィルを読み、書き込みを行ったのは、西南戦争のさなかの1877年6月24日から7月25日のあいだであり、すでに思想家として一家をなしている時期である。ちなみに松沢弘陽は木村匡、I.Hallの研究を踏まえて、福沢がトクヴィルに触れた経緯をつぎのように推測している⁹⁶。すなわち森有礼が1873年にアメリカから帰国した際に、図書館を造るべく多くの書物を持ち帰ったが、持ち帰った書物の中にトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』が含まれており、それに福沢が接したというのである。また岩永健吉郎は、森有礼が神田孝平に英訳本を贈り、明六社の人々に注意を喚起したと述べている⁹⁷。福沢

手沢本は森の持ち帰ったものではない可能性が高い。おそらく森の蔵書でトクヴィルを知った福沢が、独自に入手したと考えるのが妥当であろう。6. の中津市校というのは、福沢の後輩小幡篤次郎が1871年、大分県中津市に開設した英学校である¹³。この中津市校旧蔵洋書にはほかにミルのOn Libertyや、モンテスキューのThe Spirit of Lawsなど、数十冊の社会科学を中心とした洋書が現存する。これらの洋書は中津市校の学生が共同で利用したものか、アンダーライン、サイドライン、書き込みはなく、ところどころに赤い不審紙をはがした跡が残っている。Reeve英訳本も同様に、アンダーライン、サイドライン、書き込みはなく、赤い不審紙の跡が見られる。この不審紙は、安西が福沢論吉手沢本について指摘したように、個別の単語に対して貼付されたものであろう。というのは不審紙の残痕が各頁の端ではなく、単語の上下および左側にあるからである。たとえばReeve英訳本の、CHAPTER 1の17頁、下から5行目terminatesの下であり、また20頁、上から11行目meanの左側、CHAPTER 2の28頁、下から5行目Atlanticの上に赤い残痕を見ることができるのである。

3. と6. の2冊を除くと、新渡戸旧蔵書や国会図書館本がいつ日本に流入し、如何なる経路をたどったものなのか判然としない。新渡戸旧蔵書は留学先で入手したものかもしれない。しかし現存するものの背後に、さらに多くのReeve英訳本が出版から数年のタイムラグで輸入されたと考えても間違いはないだろう。蘇峰の場合は出版後7年で入手したのである。明治期における洋書の販売は、東京という地域や丸善という書店に限定された商行為ではない。京都では1886年には村上勘兵衛書店がA.S.Barnesの洋書の取り扱いを始めているし、大阪には1889年ころ、すでに洋書の古本を扱う店もできている¹⁴。また上記の7種のほか、井伊玄太郎は『米国の民主政治』(1948年刊)のなかで、翻訳にあたって1841年のニューヨーク版と1889年のロンドン版を参考にしたと記している。この2種は未見であるが、19世紀の日本には少なくとも9種類のReeve訳Democracy in Americaが流入していた可能性がある。

3. 日本語での受容

Reeve訳が流布したとはいえ、やはり明治の日本社会で流通するためには日本語訳が登場しなければ拡大は見込めない。明治期におけるDemocracy in Americaの日本語での受容については、すでに出原政雄が福沢、肥塚龍、市島謙吉、高田早苗、植木枝盛を中心に触れている¹⁵。そこで出原の研究をもとに、少々の知見を加えて、1870年代から80年代までの日本語での受容を年表のかたちであとづけてみることにしよう。ここで取り上げるのは、Democracy in Americaの翻訳、ならびに著作、論文の中で直接トクヴィルに言及しているもの、参考文献としてあげているものに限定する。

1873年 小幡篤次郎訳『上木自由論』(同年中村正直訳『共和政治』(原著Gillet, The Federal Government)序文) 1874年2月20日 古沢滋「対問」(『日新真事誌』) 1876年3月20日 社説(『東京日日新聞』) 1876年11月19日 小幡篤次郎訳「仏人トクヴェル氏ノ著書「デモクレーセ、イヌ、アメリカ」中ヨリ合衆邦人ノ義気ヲ論スル一篇ヲ訳ス」(『家庭叢談』23号) 1876年12月23日 小幡篤次郎訳「トウクヴェル氏ノ著書デモクレーセ、イヌ、アメリカヨリ訳出ス」(『家庭叢談』34号) 1877年 福沢論吉『分権論』 1878年 土居光華訳「合衆国人ノ義気ヲ論ス」「合衆国人権利ノ思想ヲ論ス」(土居編『偶評欧米大家所見集』所収) 1878年頃 福沢論吉「覚書」¹⁶ 1879年1月23日 犬養毅「人間同等ノ主義」(『郵便報知新聞』) 1879年 久松義典訳「民人自治論ト社会同等論ノ異同ヲ弁ス」(久松編『泰西雄弁大家集』所収) 1880年6月26日 永田一二「国会論 第五編 集権ノ事」(『愛国志林』第6編) 1880年8月8日 無署名 「大邦ト小邦ノ利害」(『愛国志林』第10編) 1881年~82年 肥塚龍『自由原論』全8巻 同年7月9日 肥塚龍「非貧民救助論」(『東京横浜毎日新聞』) 1881年 松田正久訳『仏国政法論』第4帙(原著Batbie, Traité du droit public et administratif) 同年 栗原亮一「共和政治ノ効益ヲ論ス」(栗原編『泰西名家政治論纂』所収) 1884年1月 徳富蘇峰『明治廿三年後ノ政治家ノ資格ヲ論

ス』同年 2 月 徳富蘇峰『自由、道德及儒教主義』／1885 年 6 月 徳富蘇峰『新日本之青年』
 1886 年 6 月 12 日 中村正直「杞憂ヲ誤ル勿レ」(『東京学士院会雑誌』第 8 巻第 5 号) 同年 10 月 3 日、5 日 星亨「地方自治の事を重んずべし」(『燈新聞』)／同年 10 月 徳富蘇峰『将来之日本』／1887 年 8 月 竹越与三郎『政界之新潮』／1887 年 肥塚龍『自由原論』再版／1888 年 11 月 8 日～13 日 高田早苗「自治論」(『読売新聞』)／1889 年 4 月 14 日 無署名「自由の鉄壁、国家の基礎」(『京都日報』)／1889 年 市島謙吉『政治原論』／1890 年 1 月 23 日 高田早苗「衆議院議員選挙法講義」(『読売新聞』)／同年 4 月 中江兆民『選挙人の目ざまし』／1890 年末もしくは 91 年はじめ 島田邦二郎「立憲政体改革之急務」¹⁴

以上の年表に少々の解説を付け加えよう。まず『東京日日新聞』76 年 3 月 20 日の「地方分権論」は無署名であるが、出原は福地源一郎執筆と推測している論説である。福地はあるいは岩倉使節団で欧米を回った際にトクヴィルを知ったのかもしれない。つぎに 80 年の「大邦ト小邦ノ利害」は無署名であるが、植木枝盛が書いたものと言われている¹⁵。竹越は 87 年の『政界之新潮』だけでなく、91 年の『新日本史』(民友社刊)でもトクヴィルに言及している。89 年の『京都日報』は民友社系の新聞社である¹⁶。出原は福沢を媒介として改進黨、自由党にトクヴィルが受容され地方自治思想、平和思想に多大な影響を与えたことを指摘した¹⁷。この出原の見取り図を一步進めてつぎのような構図を描くことはできないだろうか。最初に森有礼と福地源一郎を窓口としてトクヴィルが日本に紹介される。森は明六社を通じて中村、福沢に伝え、そこから改進黨、自由党、民友社へとひろがる。図式にするなら

森有礼→明六社→中村正直→

→福沢論吉→改進黨
 →自由党
 →民友社

福地源一郎→

といったところであろうか。

さて一般社会に影響を与えたのはやはり肥塚龍の『自由原論』であろう。この『自由原論』は Reeve

英訳からの重訳であり、有隣堂をはじめ東京の 7 軒の書店が合版で出版した¹⁸。『自由原論』の広告は『朝野新聞』『近事評論』『中立正党政談』『東京日々新聞』などに掲載されている。この書物がどのくらい読まれたものか、その手掛かりとしてつぎに第 1 輯から第 3 輯までの掲載の状況をみてみよう。

第 1 輯

81 年(以下略)1 月 13 日『近事評論』／1 月 16 日『中立正党政談』／1 月 19 日『朝野新聞』／1 月 20 日『東京日日新聞』／1 月 23 日『大阪日報』

第 2 輯

3 月 27 日『中立正党政談』／3 月 28 日『東京日日新聞』『近事評論』／4 月 2 日『朝野新聞』／7 月 1 日～(2 回)『方円珍聞』

第 3 輯

6 月 17 日『朝野新聞』『東京日日新聞』／6 月 23 日～(2 回)『近事評論』／7 月 3 日～(8 回)『中立正党政談』

『自由原論』の広告は、筆者の調査では改進黨系の『東京横浜毎日新聞』や『郵便報知新聞』、福沢系の『交詢雑誌』などには掲載されなかったようである。ちなみに第 2 輯の広告を出している『方円珍聞』は、和歌山で発行された『団々珍聞』の類似誌である。『団々珍聞』にも『自由原論』の広告は見ることにはできない。このようにして見ていくと、同時期の翻訳本スポンサーの『社会平権論』¹⁹ やプルンチュリの『国家論』²⁰ に比べると広告量は圧倒的に少ない。『自由原論』第 3 輯は例外的に複数回掲載されたのに対し、『社会平権論』『国家論』は長期間にわたって繰り返し掲載されている。定価も『自由原論』が 1 輯 50 銭であるのに対し、『社会平権論』は 1 冊 20 銭、『国家論』は 40 銭である。広告量や定価から見ると限りにおいては、肥塚の『自由原論』はあまり流通していないようにも思える。しかし 87 年に再版されたことを考えるならば、初版以降、民権派を中心とするさまざまな思想家が取り上げたことによって、社会一般へ浸透したといえるのではないだろうか。さらに蘇峰との関係で言うならば、85 年 1 月に改正された「大江義塾規則」のなかに本科 2 年生の政治科目として「トクウキル氏米國共和

論」があり³³、また86年第2級の政治科目に「自由原論」の文字がある³⁴。この「自由原論」について花立は、これが学科名であるのか教科書名であるのか決めるのは難しいと、判断を保留している³⁵。だが「大江義塾規則」第2条但書に「已ニ翻訳書備ハルモノハ其書ニ依ルコトアルベシ」と記されている。大江義塾では85年から、高価な洋書ではなく、肥塚の『自由原論』をテキストに使用したと考えてもよいのではないだろうか。また植木枝盛も肥塚の『自由原論』を読み、書き込みを行っている。植木は「閲読書日記」によると1884年10月から12月にかけて「トクヴィール自由原論 3冊」を読み³⁶、現在同志社大学図書館植木文庫に2冊(第2巻欠)の肥塚訳『自由原論』が収められている³⁷。

4. 手沢本の書き込み

さて蘇峰手沢本には翻刻部分を見ていただくとわかるように、ほとんどの頁にアンダーライン、サイドラインがひかれ、日本語の書き込みを中心に、英語、記号が記されている。本文について述べる前に、まず読書時期から始めよう。蘇峰が本書を読み始めたのは、第1巻が82年12月、読了は83年5月18日。ただし開始と終了の時期は鉛筆で同時に書かれたようだが、その下に青鉛筆で83年4月終了という文字がある。これは翻刻部分に注記したように1883ではなく1893かもしれない。この部分は文字が薄れて判読し辛い。83、93のどちらにせよ、記述の仕方から考えて、82年12月から83年5月18日までの半年間で第1巻を読んでいたと見て間違いない。第2巻は83年5月21日から83年6月29日の約1カ月で読んでいる。さらに蘇峰は34年後の大正5年9月22日、再読している。

それではつぎに日本語の書き込みがどのように行われているのか見てみよう。書き込みの部分とそこに記されている書き込みの数はつぎのとおりである。

Vol.1

Intro. 1 C.1 1 C.2 4 C.5 6 C.6 1 C.8 12 C.10 2 C.11 2 C.12 3 C.13 17 C.14 8 C.15 4 C.16 4 C.17 27 C.18 29

Vol.2

Pre. 1 I C.1 1 C.2 1 C.4 1 C.5 1 C.6 1 C.8 2 C.10 3 C.11 1 C.13 2 C.14 1 C.16 1 C.17 3 C.19 1 C.20 3 C.21 2 II C.1 1 C.3 1 C.4 2 C.5 1 C.6 1 C.7 6 C.8 4 C.9 1 C.10 2 C.11 1 C.13 2 C.14 6 C.15 2 C.16 1 C.17 4 C.18 2 C.19 1 C.20 3 III C.3 1 C.5 1 C.6 1 C.8 1 C.9 1 C.11 1 C.12 2 C.14 4 C.17 2 C.18 6 C.19 4 C.20 3 C.21 6 C.22 4 C.23 2 C.24 1 C.25 2 IV C.2 2 C.4 3 C.5 3 C.6 5 C.7 4 C.8 3

Vol.1はCHAPTERが18、全440頁であるのに対し、Vol.2はCHAPTERが75、全309頁。ページ数の比率は4：3。1CHAPTERあたりのページ数はVol.1が約24頁であるのに対し、Vol.2は約4頁で、6:1の割合である。書き込みは先に述べたように全部で249カ所(258件)にのぼる。ひとつの箇所には複数の書き込みがなされている場合がある。以下件数をカッコに記すと、その内訳はVol.1が121カ所(124件)、Vol.2が128カ所(134件)。Vol.2の内訳はIが25カ所(27件)、IIが41カ所(41件)、IIIが42カ所(44件)、IVが20カ所(22件)である。1CHAPTERに6カ所以上の書き込みがあるのはつぎの9件で、参考のために、井伊訳のタイトルを付す。

Vol.1	C.5	個々の州における政治	6カ所
Vol.1	C.8	連邦憲法について	12カ所
Vol.1	C.13	アメリカにおける民主主義の政治について	17カ所
Vol.1	C.14	アメリカ的社会が民主主義の政治から引出している真実の諸利益は何であるか	8カ所
Vol.1	C.17	アメリカ連邦で民主的共和国を維持させる傾向のある主要な諸原因について	27カ所
Vol.1	C.18	アメリカ連邦領土に住んでいる三人種の現状と予想される将来とについての若干の考察	29カ所
Vol.2	II C.7	市民的団体と政治的団体との関	

- 係 6カ所
- Vol.2 II C.14 アメリカ人における物質的享楽への好みはどんなふう自由愛と公務への配慮とに結合しているか 6カ所
- Vol.2 III C.18 アメリカ連邦と民主的社会とにおける名誉について 6カ所
- Vol.2 III C.21 大革命は何故にまれになるのであろうか 6カ所
- 蘇峰の日本語の書き込みにはいくつかのパターンがある。第1に、翻刻No.4やNo.9のようにトクヴィルの記述に対して自己の立場を表明するもの。これには賛成反対両方の意見があり、翻刻No.6のように日本との比較で意見を述べるものもある。第2に、翻刻No.2やNo.25のように描写や表現に感動するもの。第3に、翻刻No.7のように内容のポイントを記すもの。第4に、翻刻No.13のようにReeveの翻訳を批判するもの。日本語の書き込みに対して英語のものは非常に少ない。また記号の意味するところは判読できなかった。それではここで翻刻に移ることにしよう。

註

- 1) 山下重一「トクヴィル、福沢諭吉、徳富蘇峰」(『福沢諭吉年鑑』2 1975年)、杉井六郎『徳富蘇峰の研究』(法政大学出版会 1977年)174～5頁、253頁、花立三郎『徳富蘇峰と大江義塾』(ペリかん社 1982年)25頁、同『大江義塾—民権私塾の教育と思想』(ペリかん社 1982年)36頁。
- 2) 徳富蘇峰『蘇峰自伝』(復刻版 同志社大学 1986年)190頁。
- 3) 前掲『徳富蘇峰と大江義塾』25～6頁。
- 4) 前掲山下重一論文。なお蘇峰がスペンサーの『社会学原理』を読んだのは、お茶の水図書館所蔵手沢本によると、1884年であるという。
- 5) 『蘇峰随筆』(民友社 1925年)246～8頁「当時書生の懐中」。
- 6) 前掲『徳富蘇峰と大江義塾』331～351頁。
- 7) 書き込みの「I.Tokudomi」はいうまでもなく徳富猪一郎である。徳富は一般には「とくとみ」と読み慣わしているが、地元水俣では「とくとみ」と濁って呼ぶのだと、蘇峰記念館の方にご教示いただいた。
- 8) 中村尚美『小野梓』(早稲田大学出版部 1989年)166頁。
- 9) 前掲『徳富蘇峰と大江義塾』25頁。

- 10) 前掲山下重一論文。松沢弘陽「文明論における「始造」と「独立」」(『福沢諭吉年鑑』10 1983年、のち『近代日本の形成と西洋経験』岩波書店 1993年に収録)。安西敏三「福沢諭吉とA. D. トクヴィル『アメリカにおけるデモクラシー』序説」(『福沢諭吉年鑑』6 1979年)、同「福沢手沢本A.d.Tocqueville, Democracy in America, Tr.by H.Reeve」(『福沢諭吉年鑑』9 1981年)。
- 11) 前掲松沢論文。木村匡編『森先生伝』(1899年)、I.Hall,Mori Arinori,1973。
- 12) 岩永健吉郎「解説」(岩永健吉郎・松木礼三訳『アメリカにおけるデモクラシー』研究社 1972年)。
- 13) この学校で使用した図書には「中津市校蔵書之印」という朱の角印が押されている。中津市校旧蔵洋書はかつて旧小幡記念図書館、中津南校、福沢記念館の3カ所に分置されていたが、現在では中津市立小幡記念図書館に一括して収蔵されている。なお前掲安西論文「福沢諭吉とA. D. トクヴィル『アメリカにおけるデモクラシー』序説」では、中津市校旧蔵洋書には数冊のReeve英訳本が収められていると記されているが、筆者が1996年11月に現地で調査した際には、77年版が1冊現存するのみであった。
- 14) 『日出新聞』1886年9月14日広告「米岡紐育府A.S.BARNES出版会社書籍着荷広告」。『東雲新聞』1889年4月13日広告「舶来洋書古本大安売 小谷松恵堂本店」。
- 15) 出原政雄『自由民権期の政治思想』(法律文化社 1995年)115～9頁、130～8頁、151～7頁、164～170頁、204～222頁、258～264頁。
- 16) 『福沢諭吉全集』第7巻(岩波書店 1959年)。なおこの「覚書」については前掲松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』342頁参照。
- 17) 江村栄一校注『日本近代思想大系9 憲法構想』(岩波書店 1989年)489～490頁。
- 18) 『植木枝盛集』第10巻(岩波書店 1991年)著作年譜参照。
- 19) 『京都口報』については拙稿「京都滑稽家列伝」(西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房 1999年)を参照されたい。
- 20) 前掲出原政雄『自由民権期の政治思想』。
- 21) 国立国会図書館所蔵肥塚龍『自由原論』(31-109)奥付。
- 22) 松島剛訳。
- 23) 平田東助訳。
- 24) 花立三郎・杉井六郎・和田守編『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』(三一書房 1978年)345頁。
- 25) 前掲花立三郎『大江義塾—民権私塾の教育と思想』111頁。
- 26) 前掲花立三郎『大江義塾—民権私塾の教育と思想』113頁。
- 27) 前掲『植木枝盛集』第8巻 278頁。「購求書日記」には本書は記されていない。
- 28) 『同志社大学図書館所蔵 植木文庫目録』(1975年)15頁。以下、植木が書き込みを行っている部分を示す。
第1巻

総論30～31頁	「宗教ヲ信スル者ハ……朋友トハナリタリ」の右傍に「、」「○」	第3巻	
28～29頁	「移住ノ人民ガ……是ナリ」の右傍に「○」, 欄外に「米國共和政治ノ原因」	9頁	「而シテ英仏二國立法部ノ……」の欄外に「立法部ニ関スル歐米裁判權ノ異」
33頁	「新英倫諸州ノ文明ハ……一般タリ」の右傍に「○」, 欄外に「新英倫ノ文明」	18～19頁	「即チ此國ノ立法部ガ……是ナリ」の右傍に「、」
35頁	「亜米利加ニ於テ……」の欄外に「米國人民知識平均ノ原因」	48頁	「其國ノ重ナル……」の欄外に「米仏行政權力ノ輕重ニ差殊ヲ見ルノ理由」